
RUN

眞澄かなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R U N

【Nコード】

N 4 8 0 5 B A

【作者名】

眞澄かなた

【あらすじ】

運び屋夫婦（いろいろ規格外な人間夫とエルフの妻）の異世界冒険譚。今のところ年齢制限なしですが、今後の展開によっては制限つきになるかも？（未定）

変人とツンデレ

「まだかかりそうか？ 刀祈^{とぎ}」

「ううーん、砂が問題なんだよ、これは。砂を遮断しないことにはどうしようもないね。風で飛ばして、コーティングしたらイケるかな……どう思う？ セレフアス」

「そうだな。イケるんじゃないか？……ココが砂漠じゃなかったらな」

「ははは……」

橘^{たちばな} 刀祈は乾いた笑い声を上げながら、工具片手にそのまま後ろに倒れ込んだ。ここら一帯はパウダースノーならぬパウダーサンドの砂漠なので、地面は柔らかく刀祈の体を受け止めてくれる。しかし、そのパウダーサンドのせいで、刀祈自慢のお宝、自動四輪車（レア物）が動かなくなってしまったのだ——砂漠のど真ん中で。

「やはりさっきの街でサンドホースを借りるべきだったな」

「ううー…」

澄み渡った青空を背景に、逆さに見える背の高い伴侶が苦笑する。

風に弄ばれているプラチナブロンドの長い髪が、冬の脆弱な日差しにきらきらと輝いて美しい。身にまとっている物は刀斬と変わらな
いほど質素で、長旅で大分くたびれているのに、彼女が着ていると
いうだけでビンテージ物に見えるから不思議だ。

「サンドホースに乗るのはちょっと遠慮したかったんだよ」

「乗れなかったのか？」

「僕は君と違って都会のもやしっ子としてすくすくと育った貧弱青
年だよ？サンドホースに取り付けられた硬い鞍だとか、長時間の振
動の中での移動とか、絶対対つ無理っ！」

「威張ることか？」

「威張ってない。これは単なる事実で、それをふまえた主張だよ、
セレス」

「っ！……外で略称を呼ぶなっ」

「慣れないなあ」

「言っただろう。私の種族『リーフ・エルフ』の一族の掟で、名前
を略して呼んでいいのは伴侶だけだよ！」

「僕は君の伴侶だから問題ないだろ？」

「……そ、れはっ……そう、だが……」

「……君は本当に可愛いなあ……」

「っっ！からかったな？！」

「本気さ！失礼だな」

「東の人種『ひとしゅイースト』は奥ゆかしいと聞いたが、嘘なのか？！」

「何事にも例外というものが存在するものだよ。個体差とかね」

「っっ！……とにかくっ！これからどうするんだ？！遊んでないで修理しろ！」

怒りばかりではなく真っ赤になったセレファスは、エルフとは思えないほどの乱暴な足取りで刀折から離れると、自動四輪車の後ろに周り、積み込んでいる荷物を漁った。冬の砂漠で野宿出来る準備があったかチェックしているのだろう。時折自動四輪車の車体が大きく揺れている。

どのみち車が直ったとしても、今時分から走って陽がある内に砂漠を越えるのは不可能だ。だったら今いるこの場にとどまり、冬の砂漠の凍てつくような夜に備えて早めに準備した方が良くとセレファスは考えたらしい。あらかた荷物チェックが済んだ後はおもむろに自動四輪車の屋根に上り、辺りを警戒する――実に分かりやすい”照れ隠し”である。

「…セ…セレファス…？」

「五月蠅い！早く修理しろっ！」

そっぽを向いたまま怒鳴ることで、”私はまだ怒ってるんだ！”と全身でアピールするセレフアスが可愛すぎて、刀祈の腹の中で笑い虫が暴れまくったがどうにか耐えた。そして、「可愛いなく、僕の奥さんは」と、溢れた愛しさを小さく……本当に小さく呟いたのだが、身体能力が馬鹿みたいに高いエルフには聞こえてしまい、「黙ってやれ！」とまた怒鳴られた。

まあもつとも、奥さんに怒鳴られるのはいつものことなので、刀祈はまったく気にしないのだが。

「はいはい。じゃあ直すとしますか」

「……出来るのか？風で飛ばしてコーティングだろ？」

「さすがにそれは無理だから、主要動力部に遮断魔法かける」

「そんなこと出来るのか？」

「僕にはね」

「……『イースト』は何やらかすか分からないってのは本当だな」

「君、プロポーズした時もそう言ってなかった？」

「っ！さっさとやれ！」

屋根からフロント部分を覗き込んでいたセレファスは、またもやそっぽを向いた。『リーフ・エルフ』に多いという”薬師”と”狩人”の証たる耳飾りを着けている尖った耳が赤い。

僕の奥さんは世界一可愛いと、ニヤけた顔を隠さず存分にニヤニヤしながら、刀祈は主要動力部に魔法をかけた。

「我望むはパウダーサンドの遮断！主要動力部を守ってヨロシクうっ！」

かざした刀祈の手から飛び出した青白く淡い光が主要動力部分を覆うように走り、動力部を全て覆うと、宙に吸い込まれるように消えていった。一番簡単な遮断魔法の完成だが、それと同時に屋根から深い溜息が降ってくる。チラリと視線だけで見上げれば、セレファスが屈んで頭を抱えていた。

「なに？どうかした？」

「相変わらずなんてデタラメな呪文^{スぺル}なんだ、お前の魔法は」

「要は、使いたい魔法の効果の想像力と、言の葉に乗せる魔力だろう？呪文の文句は想像を高めるための鍵でしかないんだから、なんでもいいじゃないか。どの魔法を使いたいかとか、範囲はちゃんと入ってるんだから」

「”ヨロシクうっ！”は必要か？」

「ただのノリだよ……さ、行こうか。もうちょっと行ったら水場に着くはずだから、今日はそこで休もう」

「……ああ、そうだな。どうこう言ったところで栓のない話だった」

「そこまで気にすることじゃないだろー。僕は滅多に魔法なんて使わないんだし」

「そういう問題じゃない」

「お前の呪文は力が抜ける」と苦笑しながら屋根から助手席に移動するセラフアスを横目に、「そんなにヒドイかな」とぼやきながら運転席に座った刀析は、キーを回してエンジンを起こすと、アクセルを踏んでゆっくりと発進した。

青く澄んでいた空はいつの間にか黄身がかった色に変わっており、あといくらしもない内に赤く焼けてくるだろう。地平線に太陽が隠れてしまう前に水場にはたどり着きたいところだが――どうやらそうもいかないようだ。

「……何かの群か？」

前方の砂煙に気付いたセラフアスの問いかけに、今度は刀析が溜息を吐いて答えた。

「砂漠の民だねえ」

「盗賊か」

「そうとも言う」

”群”とセレファスが表したように、結構な数のサンドホースに跨った盗賊と砂煙が真っ直ぐこちらに向かってくる。

「あー、完璧僕ら狙いだね。しょうがないな……セレス！しっかり捕まってる！」

「略称で呼ぶなと言うのにつ！」

勢いよくハンドルを切って進路を北から東に変えると、刀折は思い切りアクセルを踏み込んだ。

「いっけええーっ！」

ぐんっとスピードを上げる自動四輪車に、矢の雨が降り注ぐ。ハンドルを左右に切って直撃は免れるが、何本かは屋根に突き刺さった。

「魔法かけてない?! どんだけ丈夫な鏟やじりなんだよっ」

「泣くなよ」

「この間外装変えたばかりだったのにつ！いくらかかったと思ってるんだっ！」

「いくらかかったんだ？」

「……あ」

「後で詳しく聞こうか」

「あははは………はあ………」

自動四輪車とサンドホースの追いかけっこは、夕焼けを背景にしばらくの間続いた。

刀析の出身国である『陽昇る暁をいただく始まりの国（通称・アカツキ又は陽昇^{ひしやう}国）』のように、道が舗装されていたなら、サンドホースに遅れを取ることは絶対にならないのだが、ここは砂漠で、舗装されているどころか道すらない。

あるのはさらさらのパウダーサンドのみで、自動四輪車のような重い乗り物との相性は最悪だ。

何度目かの攻撃の折、このままでは埒が明かないと、一人の盗賊がタイヤを射抜いた――途端、バランスを崩した車をなんとか立て直そうと、刀析は忙しくハンドルを切りさばく。車はやや減速しつつも蛇行しながらなんとか前へ前へと進んで行ったが、その先に大きく口を開けていた流砂に足を取られ、そのままズルズルとその中へ滑り落ちてしまった。

「刀祈！車から降りるぞ！」

「大丈夫。このまま中に行こう」

「正気か?!」

「大丈夫だから。僕を信じて」

「……」

刀祈の言葉にセレファスが一瞬で覚悟を決めておとなしく助手席に座り直すのを見届けてから、正面に視線を戻すと、フロントガラスの向こうのフロント部分は、もう半分ほどパウダーサンドに埋まっていた。しかし、その部分をよくよく見てみると、淡く輝く青白い光が、パウダーサンドを押しつけているのが分かる――先ほどの遮断魔法が持続しているのだ。

「我望むはパウダーサンドの遮断！我、橘刀祈と、我が最愛の伴侶、セレファス・セレスタイトを守りし膜となれっ！風よ！遮断結界の内に吹きて、命を繋ぐ息吹となれっ！」

続け様に呪文を唱え、二つの魔法を同時に発動させると、淡い光が車内に溢れる。青白い光は主要動力部にも施した遮断魔法。そしてもう一つの春の日差しのような淡い黄色の光は風の魔法だ。パウダーサンドを遮断し、風を送って空気を確保することで、パウダーサンドの中を移動出来るのようにしたのである。

「アカツキ人は皆こんなにもデタラメな魔法を使ってるのか？」

周囲の盗賊を気にしながらも、セレファスは呆れたように言った。盗賊たちは流砂に巻き込まれない場所で刀祈たちが車から降りるのを待っていたが、降りる気配がないのを見て浮き足立っている。車の三分の二はすでに砂の中。窓という窓がミシミシと嫌な音を立てた。

「そんなに変かな？」

「呪文を一つ一つ唱えるのではなく、二つ合わせたような呪文一つで二つの魔法を発動させるのが変でなくてなんだ？」

「合理的？」

「……なるほど。覚えておこう」

ふふっと笑ったセレファスの微笑みにほのぼのと幸せを感じていると、ついに砂の圧力に耐えかねた窓ガラスが割れた。車内が砂でいっぱいになる前に、セレファスの膝に置かれている彼女の手を取り、本当に大丈夫かと問いかけるブルーグリーンの瞳に笑みを返す。

「何も心配ない。ここは入口だから」

「……入口？」

「そ。ちょっと遠いかもだけど」

喋れたのはそこまでだった。

遮断と風の魔法で呼吸は確保されたが、視界は真っ暗に閉ざされる。まるで、暗闇に独り閉じこめられたように感じる中、繋いだ手のぬくもりだけがお互いの存在を主張していた。

遺跡にて

ランプの光に照らし出される壁画にはロマンがある——ついでに歴史も。

そうラグアが言うと、歴史がついでかよ、と、古い友人はアカツキ人特有の黒に近い紫紺の瞳を細めて笑っていた。

あれはいつのことだっただろう——もう随分と彼には会っていない。

「ラグアさーん、ドコですかー？」

千年王國全盛期に描かれたと思われる壁画をしみじみと眺めながら、友と、その友との冒険の数々を懐かしく思い出していたラグアを呼ぶ声が洞穴内に響き渡る。

のんびりとした性格がよく現れているこの声は、最近ラグアに弟子入りした『ホビット』族のナナイだろう。ランプの光に照らし出された腕時計を見やれば、そろそろ昼飯時だ。弁当を届けに来てくれたに違いない。

「おーい、ちび助ー。こっちだー」

呼びかけが遠くに行きかけたので、場所を示すために声を上げる。それからしばし間があって、ラグアが数時間前にこの場所に潜り込

んだ入口から、ランプの光と共にひょっこりとナナイが顔を覗かせた。

「ボクはちび助じゃありませんよ、ラグアさん。それでも『ホビット』の中では大きい方なんですからねっ」

「唇を尖らせて文句言うような奴は”ちび助”で十分だろ」

「なんですかもーっ。お昼いらないんですかっ」

「いるよ！いる！オレの弁当っ」

持ってきたバスケット（弁当）ごと帰ろうとするナナイを引き留め、なんとか宥めてバスケットを受け取り、ホッとする。

壁画や天井画、発掘品に隠された歴史を読み解いている間は忘れる空腹感が、ナナイの声と、時計で確認した時間を見て一気に押し寄せた――つまりラグアは今、とても腹がへっているのだ。

バスケットの中からは、ナナイ特製のベーグルサンドとフルーツケーキ、それから、お茶を飲むための茶器一式が出てきた。

『ホビット』であるナナイと、『ドワーフ』であるラグア。世界の成り立ちやこれまでの歩み、姿を消したとされる神人類の謎などが刻まれた遺跡や壁画などを調査し、それらを解き明かすことに興味を持っている――というのがこの二人の最大の共通点だが、それともう一つ、二人の距離を近付けた共通点がある――それは”食事”だ。

生来牧歌的な暮らしを好む『ホビット』と、鍛冶の技術や鉱石の知識を持ちつつも、荒々しく粗野な性格から他の人種から敬遠されがちな『ドワーフ』は、食べることに關しては手間暇を惜しまない。それ故に、出先にまで茶器一式を持ち出すのは彼らにとって”普通のこと”であり、出先だからといって生ぬるいお茶ですますのは言語道斷、ありえないことだった。

ちやっかり自分の分のベークルサンドとフルーツケーキ、ティーカップを持ってきたナナイは、そそくさと茶を煎れるために湯を沸かす。貴重な遺跡で火をおこすのは躊躇われるので、用意されたのは温石^{おんじやく}だった。

温石とは、魔法を吸い取ることが出来る『吸引石^{きゅういんせき}』に火系の魔法を吸わせた石で、手の平サイズ四つほどあればたいいの料理が煮炊き出来る、この世で最も簡易^{ポピュラー}な魔法具だ。ちなみに、『吸引石』に水系か氷系の魔法を吸わせた石は冷石^{れいじやく}といい、生肉や野菜を冷やし、長く保存するために使われている。

「ナナイ」

「なんですか、ラグアさん」

「お前は歴史ロマンを求めて、世界を旅しようとは思わないのか？」

「はい？……なんですか、藪から棒に」

「いや、なに。さっきふと、昔のことを思い出してな。オレは今の住居に落ち着くまで、友と旅をしてたんだよ」

「それはなんというか……見上げたご友人ですね。最近弟子になっ

たばかりの穏和でのんびり屋な『ホビット』のボクでも、ラグアさんの言葉に何回キレそうになったか分からないのに」

「おい！それは言い過ぎじゃないか？！」

「はい、どうぞ。今日は寒かったですから、しょうが入りの紅茶にしてみましたよ。お砂糖は二つでいいですか？」

ラグアの突っ込みを華麗にスルーして、にこにこティーカップを差し出すナナイ。柔らかく湯気を立ち上らせる紅茶とその笑顔の前に何も言えなくなり、ラグアはもじゃもじゃ髭の中に隠れた口を真一文字に引き結んだ。

前述の通り、牧歌的な暮らしを好む『ホビット』は、生まれ親しんだ土地を離れることは滅多にない。自給自足の生活をしている彼らは、汗水を垂らして田畑を耕し、苗を植え、仲間と苦楽を共にしながら世話をし、自然の恵みに感謝しながら収穫する。それらを美味しい料理にし、食事の時間を最大限に楽しむ——それが一般的な『ホビット』のライフスタイルだ。

そんな彼らには、長旅をする時間的余裕も、田畑を放ってまで旅に出る必要もまったくない——つまりナナイのように、この世界の歴史や遺跡を求めて生まれ育った土地を飛び出すような『ホビット』は、滅多にいない……というか、ラグアは百年近い人生の中で、彼以外見たことがなかった。

したたかで、若干（？）性格が歪んでいても当たり前だと、無理矢理自分を納得させたラグアは、黙って食事の準備を始める。

多少（？）性格に難があっても、作る飯が美味ければラグアに異存

はない。

「歴史ロマンを求めて旅をしたから、今、ボクは、ラグアさんの弟子になってるんだと思いますけど……違いますかね？」

「いや、うん、そうだな」

「もしラグアさんが、この地底遺跡・千年王國を調べつくして、次の遺跡を求めて旅をするって言うんなら、ボクも一緒に行きますよ——まだその時も弟子だったらね」

「ああ」

ラグアは友との旅の果てにこの遺跡に辿り着き、ここ近くに居を構えた。遺跡について調べ、調査結果をまとめて学界に発表し、本を出版した。ナナイはその本を読んで歴史ロマンの虜になり、この地にやってきたのだ。

それは、一生を故郷で過ごす『ホビット』にとって、未だかつてない大冒険。若い頃、友と一緒に世界中を旅したラグアの冒険と大差ない。

短い返事をかえした後は、言葉少なに昼食に舌鼓を打った。絶妙なバランスで作られたナナイ特製のベーグルサンドをゆったりと味わい、フルーツケーキとしょうが紅茶で疲れを癒す。

お茶をもう一杯お代わりする頃にはすっかりくつろいで、数少ない『ドワーフ』用ブーツを脱ぎ捨て、いつの間にか疲労で凝り固まったふくらはぎを揉みほぐしていると、ラグアとナナイしか居ないは

ずの静かな遺跡に、かすかな物音が聞こえた。

「……今、なんか聞こえたな？」

「町の人たち……が、来るわけないか。き……気のせいとか……うひ
いっ」

捕らえた物音を気のせいだと流そうとしたナナイは、あえなく失敗する。かすかでしかなかった物音が、より明確に聞こえたからだ。

カツカツと規則正しい音と、カッーン、カッーンと、間が空いて不規則な音。その二つから推測される音の正体は、二人の人間の足音。

脱いだブーツを履き直したラグアは、護身用を兼ねた隠し扉（たまに罠）を壊すための大金槌を手にしち上がった。ナナイは戦闘力が皆無なので、おとなしくラグアの背中隠れる。

物音に耳をすませていると、不規則な足音に合わせているのか、規則正しい足音が時折止まっているのが分かった。慣れない遺跡歩きにヨレヨレになった観光者なら問題ないが、貴重な遺跡の宝を盗掘しに来た荒くれどもだったら、いささか厄介である。

ラグアとナナイが居る場所は、『ドワーフ』の英雄王・ガレドアンクが建国した千年王國の王城、一階ホールの奥。どうやら使用人の部屋だったらしいこの狭い室内では、当時の生活を窺わせる小物がいくつか発見された。

歴史的価値はプライスレスの代物だが、盗掘者たちが喜びそうな金

銭的価値のありそうな”お宝”ではない。そういった宝物は、もつと地下へと降りないとみつからないだろう——そう。この王城は普通の建物と違って、地下へ深く広がっているのだ。

二つの足音が少しずつ、だが確実に近付いてきている。大きく響いて聞こえるのは、侵入者が一階ホールまで辿りついたからだろう。

ホールと名が付くその広間は、いわゆる王城の玄関ホールで、百人の客人（もちろん、『人間』、『エルフ』、『獣人』、『魔人』のような『ドワーフ』よりも大きい人たちでも！）が来ても余裕で迎えられる広さを誇る。まあもつとも、國が滅んだ今となっては、過去の栄華になんともいえない哀愁を感じる光景なわけだが——何も遮るものがないその空間では、当然、物音がよく響くわけだ。

「誰ですかね、ラグアさん」

足音と、自身の息遣いしか聞こえない緊張感に耐えられなくなったらしいナナイが、不安そうにひそひそと囁く。

「さてな。会ってみないと分からん」

「それはそうですけど……」

「観光客や、オレらみたいに歴史ロマンを求めてきた奴らならよし。それらを台無しにするようなならず者なら……」

「ならず者なら……？」

「こいつでガツンだ」

「……死んじゃいますよ、大金槌そんなもので殴ったら。よくて複雑骨折じゃないですか？」

「うまくやるさ」

「や、だから、うまくやっても複雑こっ——」

突っ込み（ことば）が不自然に途切れた。

大地に根ざして生きる『ホビット』特有の明るい茶色の瞳がまん丸に見開かれ、この部屋唯一の出入口を見つめている。同じく、毛深い『ドワーフ』特有のもしやもしやの髪に埋もれるように隠れた小さな黒い瞳も、出入口……いや、そこに現れたあまりにも予想外な人物を映し出し、限界まで見開かれた。

「なんでこんなところで『ドワーフ』と『ホビット』がいるんだ？……私の見間違いか？」

「……い、いや……僕にも見えるから、見間違いでも、幽霊でもないよ」

美しい『エルフ』の女性と、疲労困憊といった感じで両膝に手を当てているアカツキ人らしき男性の二人組。

驚いたことに、ラグアはそのアカツキ人に見覚えがあった。『イースト』の顔は見分けがつけ難いが、さすがに共に冒険の旅に出た”

友人”の顔を間違えるワケがない。

「……刀祈……なのか？」

遺跡にて2

名前を呼んでから、それはオカシイと気付いた。

『人間』はこの世界に生存するどの人種よりも寿命が短い。百年生きられればいい方で、最高で百五十二歳まで生きたという者もいたが、それは例外中の例外だ。肉体のあらゆる箇所がアカツキ国のカラクリ仕立てになっていたというから、半分死んでいたと言っても過言ではないだろう。

ラグアが友人のアカツキ人・橘 刀祈と旅をしていたのは今から七十年ほど前。お互いが二十代だった頃だ。それに対して、目の前のアカツキ人の青年は二十代半ば。アカツキ人が若く見えることを念頭に置いて多く見積もったとしても、三十代前半といった若さだ。

ラグアの友であるわけがない。

と、なると、「刀祈の息子か、孫になるのか？」という結論に至るわけだが、ようやく乱れていた呼吸が落ち着いた青年は、笑顔で応えた。

「ラグア。久しぶりだな。かれこれ七十年ぶりくらいか？」

「本人なのか?! また随分と”若作り”じゃないか、刀祈!」

「ちょ、ラグアさん?! 若作りとかいうレベルじゃないですよっ?!」

ラグアの冒険の話は、今まで出版した書籍のあとがきにいくつか記したので、それを読んだことがあるナナイは、目の前のアカツキ人がどういった人物なのか見当がついたらしい。ラグアの返答に直ぐ様ツツコミを入れてくる。

「どうせ刀祈のことだ。とんでもないことをしでかして、不老長寿とかにでもなったんだろうさ」

「さすがラグア！よく分かったな！」

「全肯定か！適当に言ったのに！」

「僕はただ、愛の証明をしただけだよ」

「隣の『エルフ』の嬢ちゃんにか？」

「そう。ラグア、僕の奥さんのセレファスだよ。セレファス、僕の友人、考古学者のラグア」

「私は嬢ちゃんではない」

「おう、そいつは悪かったな」

「……いや、分かって貰えればそれでいい……」

不機嫌そうに返されたので、すぐに謝罪を口にする、『エルフ』

の女はポカンとした。性格に難ありな『ドワーフ』がこんなにもあっさり謝るとは思わなかったのだろう。

『ドワーフ』は良くも悪くも誇り高い一族で、古い『ドワーフ』ほど粗野で頑固な者が多い。地下に文明を築き、身内で固まって生活をしているので、価値観までもが凝り固まってしまおう——例えその価値観が間違っていたとしても——。

ラグアも旅をする前はそうだった。

自分の考えが正しいと信じて疑わず、他者の考えなどハナから聞こうとしなかった。そのくせ何故自分の言うことが通らないのかと腹を立てていたのだから、呆れる。

井の中の蛙そのものだったラグアは、他者を気遣うことなく、ましてや、他者からの気遣いに気付くこともなく、旅の途中で刀折に出会うまで、怒りっぽくて手の早い、実に『ドワーフ』らしい『ドワーフ』だった。変わり者の刀折と一緒に旅をして、数々の困難を乗り越えていく内に、過去の自分を振り返って”恥ずかしい”と思えるようになったのだ。

今では彼も、（『ドワーフ』としては）”変わり者”の仲間入りだ。

「何やったんだよ」

「ちょっとドラゴンの血肉を食べてみたりしたんだよ」

「ちょっと?! それそんな言葉で済むことじゃないですよね!?!」

「美味かったか?」

「味！？気になるの……いや、味は大事ですね、はい」

混乱しているナナイはツツコミを入れることで安定をはかり、ラグアと刀析が何か言う度にいちいちツツコミを入れていたが、『ホビット』を見るのが初めてだったらしいセレファスに頭を撫でられ、それどころではなくなった。

内心はわはわだろうが、あまり騒ぐのも男の沽券に関わるとでも思ったのか、黙って撫でられ、耐えることにしたようだ。

「美味かったよ。意外にも鶏肉みたいな味だったから、タレつけて照り焼きにすれば良かったなあって思ったけどね」

「肉食獣なのに鶏みたいな味なのか。脂多そうなイメージなのにな」

「まあね。塩胡椒でも美味しかったからいいんだけど。新鮮だったから」

「新鮮さは何の味にも勝るからな……って、ちょっと待て。ドラゴンを食べたのになんでそんなにひ弱なんだ？不老長寿以外に、頑丈さとか強さとかは加味されなかったのか？」

ここに到着した時の疲労困憊っぷりを思い出し、疑問に思う。セレファスは平然としていたが『エルフ』の身体能力は心身共に優れている『竜人』たちに勝るとも劣らない。どれだけの距離を移動して来たかは分からないが、彼女の疲労度を基準にしてはいけないのだ。

「それが不思議なんだよねー。ドラゴンの血肉って、不老長寿だけじゃなくって、身体能力の底上げもあったはずなんだよね。書物にもそう書いてあったし、情報通の商人に話を聞いてみても、そのはずだって言ってたのに……」

「そっちは変わらずヘタレか」

「やかましいっ……これでも家でいろいろ試してみただよ？運動能力検査とかしてさ」

「変わらなかったのか？」

「見事にね」

肩をすくめる様に嘘臭さはなく、ドラゴンの血肉の恩恵を隠している風ではない。刀祈の身体能力は、頭脳にばかり栄養がいったのではないかと心配になるくらい『人間』の中でも最低ラインだから、そちらの恩恵がなかったのが本当に残念だったのだろう。笑みが苦い。

「……ドコ食ったんだ？」

「え？……あ、尻尾の先から三十センチほどかな」

「また随分と末端を食ったんだなあ。お前、それ、タンスの角に足の小指を百回連続でぶつけたくらい痛かったと思うぞ？」

「だろうね。僕がそこを斬り飛ばしたら、失神してた」

「可哀想に」

セレファスに未だに撫でられ続け、おとなしくしていたナナイが、二人の会話に我慢出来ず、「ドコからツツコミ入れたらいいかわからない!」と突然叫んで美人エルフを驚かせているのを視界の端に捕らえつつ、ラグアは刀祈の身に起きた奇妙な変化に思考を巡らせる。

「まあ、尻尾だから、当然、再生能力が活発になったんだろうな」

「え。ドラゴンの尻尾って、トカゲと一緒になの?!」

「ああ。確かそうだったはずだぞ。オレも長年ドラゴンを研究してる学者の著書を読んだことがあるが、それにそう書いてあったのを記憶してる」

「なんか可愛いなあ」

「凶暴さは全然可愛くないけどな……尻尾の超再生能力一点のみが備わったんなら、他の身体能力に恩恵はいかなかったんだろうなあ……で、不老長寿だけなのか?」

「怪我とか病気とか疲労とかすぐに回復する、かな。痛いし、弱るし、疲れるんだけど、ちよつとしたら通常に戻るんだよね」

「とことん再生にのみに恩恵がいったんだな。身体能力上げたいんだったら、地道にトレーニングしなきゃならんようだな。すぐ回復

するんだったら鍛え放題なんじゃないか？」

「そこは楽にチートになりたかったなあ」

またもや心底残念そうに苦笑する刀祈の腰の辺りを慰めるように軽く叩き（本当は肩を叩きたいが、『ドワーフ』の平均身長は『人間』の平均身長より大きく下回るから無理）、ラグアは一番始めにするべき質問をようやく投げかけた。

「……で、なんでお前ら遺跡こゝにいるんだ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4805ba/>

RUN

2012年1月13日02時55分発行